

# Mr.Omi, what are you creating?

尾身さん、なにを創っているんですか？





## 尾身大輔 | 彫刻家

Daisuke Omi | Sculptor

子どもたちが驚いたり、怖がったりしてもらえたら本望です

I would be happy if the children were surprised or frightened.



二十四の瞳映画村内を散策すると、海沿いに並ぶ塩釜にタコの姿が!?

およそ高さ1.8m、横幅2.4m、奥行き3.5mのクスノキを使った木彫りの作品が「瀬戸内国際芸術祭2025」春会期からここに登場する。この作品を作るのは香川県高松市出身の彫刻家、尾身大輔さんだ。

尾身さんと小豆島の関わりは2014年から始まった。当時、広島市立大学の学生だったことから、小豆島町と広島市立大学が運営する三都半島アートプロジェクトに参加したことがきっかけだ。これまでに、カマキリや、島で見つけたカニ、古民家を家にしたヤドカリの作品などを島内で展示してきた。老若男女が分け隔てなく、あっと圧倒される生き物をモチーフにした大きな作品が特長的な尾身さんだが、今回はどうしてタコをモチーフにしたのだろうか。製作にとりかかる最中の尾身さんに会いに、2023年に尾身さんが移住した広島県三原市の小佐木島へと向かった。

三原駅に降り立つと、駅の中で目についたのがタコの人形。駅前のロータリーにもタコが描かれた看板が立っていた。もしかしてタコは三原市の名物なのか。尾身さんにそう尋ねてみると、やはり三原市はタコが身近な存在で、以前からタコをモチーフに彫ってみたかったそうだ。佐木島のお年寄りたちはタコ壺でタコをとり、尾身さんも分けてもらったことがあるが、最近はタコが減ってきてしまっているという。モチーフを決め、タコに関する民話が香川県にないか調べてみると、妖怪「ヤザイモン蛸」の伝説があることが分かった。言い伝えによると「八左兵衛という男が岩の上で昼寝をしている大ダコを発見し、その足を毎日1本ずつ切り取り持ち帰っていた。最後の8日目になるとタコは残った足で男を海に引きずり込んだという。再び昼寝を始めたタコは「ヤザイモン蛸」と呼ばれるようになった」。尾身さんは、その妖怪が物語られるようになった背景にも思いを巡らし、船をさらい人に絡みつく荒れた波や潮の流れというような海の恐ろしさをタコとして表現した。「ヤザイモン蛸」を同じように考えると、男は漁によって海の幸を手にしてしたが、荒れた波の日に危険を顧みずに海に赴き、波に飲まれてしまったという、食欲は必ず身を食うような教訓話として解釈している。穏やかに見える海にも危険

はつきものだ。海と欲に溺れることのないようにと作品に思いを込めた。

誰にも潜む子ども心呼び覚ます  
普遍的なアート

尾身さんは作品づくりをすべてひとりで行う。今回の作品は図面を考え、模型を作り始めたのは2024年の10月。木彫りを始めたのは11月からだった。完成には4月頃まではかかりそうだという。30cmほどの柱状の木材をパーツごとに分け組み合わせて、チェーンソーなどでモチーフの形に切り出していく。「木彫りの好きなところは、最初の切り出しの段階で、だいたい形を切り出せる」と尾身さん。作品を通して自分の意見を言ったり、社会的な意味を持たせたいという気持ちは全然ないと言う。自分の中から思い浮かんだものをそのまま作っている中で、もし本当にこういう生き物があるなら、どういう生態や心理で生まれたのだろうかと思いを馳せるのだ。彫っているうちに、思い浮かぶストーリーも変わり、彫るものの形もどんどん変わっていく。「小豆島で最初に作った巨大なカマキリの彫刻は、当初は、1匹の姿がはっきりと思い浮かんでいたんですけど、最終的には2匹が交尾している状態で、片方は食われている作品になりました」。彫りながら形が変わっていくのは、木材の内側が腐っていて、その部分が使えないから形を変えてみたり、節で穴が空いていたり、いろんな要素が影響している。基本的にはリアルであることを意識し、万人が持つイメージを入れつつ、自分が持つイメージも取り入れる。「子どもたちが驚いたり、怖がったりしてもらえたら本望です」。

「暮らすことに無頓着。作品づくりができればいい」と言い切る尾身さんは、溢れ出るような創作意欲からひとつの作品を完成させた後もすぐ、次に作りたいものに気持ちは向かう。そんな尾身さんが暮らす小佐木島は人口4人の島で、尾身さんは5人目の島民ということになる。平均年齢は90代。最近では島に宿がオープンし、住み込みの若者や、週末だけ実家に畑仕事をしたりと帰ってくる人の出入りもあるというものの、とても静かな島で作業に没頭できそうな場所だった。フェリーで三原駅まで片道15分ほど。島には病院もスーパーもないので、フェリーに乗って島民はまちに出るのだろう。フェリーは1日3便ある。尾身さんは小佐木島の活性



化に取り組む公益財団法人ポエック里海財団の委託を受け、古民家を改装したアトリエ兼ギャラリーで日々製作に励んでいる。彫刻で木屑が出るので、寒い冬でも玄関先の野外での作業がつづく。製作現場は木材に使っているクスノキのいい香りが立ち込めていた。

これまで、小豆島での展示を重ねてきた尾身さんだが、小豆島の人にどんな風に観てもらいたいかが聞いてみた。「小豆島の人が、ぱっと見て分かり、単純に楽しんでもらえるものであるといいと思っています」。幼少期から昆虫や妖怪、不思議なものが好きだった尾身さんは、シンプルに「でかいからすごい」と子ども心を持つ大人や子どもに楽しんでもらえたらと言う。「僕の作る動機は『作るのが楽しいから』なので、作品も純粋に娯楽として鑑賞してもらえればと思っています」。同時に木材そのものの魅力にも触れてほしいと考えている。「普段、木の彫刻を見る機会って、仏像を見ることなどがほとんどかなと思うので、僕の作品を見て木で作っていることに対する驚きがあればうれしいです。木目など木の素材自体も見えてほしいですね」。

一目で惹きつけられる尾身さんの作品。老若男女に愛されるであろう作品であり、その経年変化とともに、さまざまな鑑賞者を迎えてくれそうだ。これから島で「ヤザイモン蛸」がどんな風に語り継がれていくか楽しみだ。

1992年香川県生まれ。2014年広島市立大学芸術学部卒業。2016年広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了。木彫を中心に、神・妖怪などの民俗信仰を基盤とした自身の空想を彫刻として具現化し、近年は虫の姿を象った彫刻を制作している。主な展示会に2022年「尾身大輔個展 空想と虫籠」、「瀬戸内国際芸術祭 2016、2022」、(香川)「三都半島アートプロジェクト 2014-2021」(香川)、2018年「広島市立大学彫刻専攻教員作品展【彫刻の輪郭】」(広島)、2017年「広島-対馬」展(広島)などがある。

Born in Kagawa Prefecture in 1992. Graduated from the Faculty of Arts, Hiroshima City University in 2014. Completed the master's program at the Graduate School of Arts, Hiroshima City University in 2016. Focusing on wood carving, he embodies his own fantasies based on folk beliefs such as gods and monsters as sculptures, and in recent years has been creating sculptures in the form of insects. Major exhibitions include "Daisuke Omi Solo Exhibition: Fantasy and Insect Cage" in 2022, "Setouchi Triennale 2016, 2022" (Kagawa), "Mito Peninsula Art Project 2014-2021" (Kagawa), "Hiroshima City University Sculpture Department Faculty Exhibition [Contours of Sculpture]" (Hiroshima) in 2018, and "Hiroshima-Tsushima" exhibition (Hiroshima) in 2017.



## Universal art that awakens the child within everyone

Sculptor Daisuke Omi from Takamatsu, Kagawa, will present a large wooden octopus sculpture at Shodoshima's Twenty-Four Eyes Movie Village during the Setouchi Triennale 2025. Made from camphor wood, the sculpture stands 1.8 meters high and reflects Omi's signature style—realistic, oversized creatures that captivate viewers of all ages.

Omi's connection to Shodoshima began in 2014 through an art project during his student years. After moving to Kosagi Island in Hiroshima Prefecture in 2023, local octopus traditions and the Kagawa folklore of "Yazaimon Tako," a mythical octopus, inspired this latest work. According to

legend, a man named Yazaimon cut off one leg of a giant octopus each day, but on the eighth day, the octopus used its final leg to drag him into the sea. The tale is seen as a warning against greed and the power of the sea.

The piece explores themes of nature's strength and the consequences of human desire. Omi carves each work alone, letting the form evolve with the wood's natural shape. He aims not for social messages but to spark curiosity and wonder, especially in children. Living and working on a quiet island, he hopes people enjoy the sculpture for its scale, playfulness, and the natural beauty of wood.

